

目標を見誤らずに随時方策を変えて最善に近づく努力を

内山 充

薬剤師がその専門的資質を維持・向上するためには、継続した生涯研修が必要であることとはいうまでもありませんが、医薬品や医療技術の進歩と同様に、薬剤師のおかれた環境や、学ぶべき事柄も、時代によって大きく変化しつつあります。今の時代に必要な、さらには来るべき時代に適応できるような生涯研修はどうあるべきか、研修を行う立場でも、また研修を受ける立場からも、常に考えておかなければなりません。

薬剤師生涯研修が目標とする理念は、「患者主体の医療に大きく貢献できて、しかも社会全体の理解と共感を得ることのできるような日常業務の構築」であると考えます。そのためには、薬剤師の研修プログラムの企画や課題選定は、臨床実務の場から生まれる問題意識に基づいて、薬剤師自身の手によって行われるのが望ましいことです。さらに、受講の動機は、教える側ではなく受講者にあり、受講者の意欲と必要性によって選択された課題を学ぶことが大切です。カリキュラムによって与えられた科目・課題を履修する大学教育との大きな違いがここにあります。

わが認証機構は、薬剤師の生涯研修・認定をお任せできるような、しっかりした体制を持つ研修実施機関（プロバイダー）の認証を推進して、上記理念の達成に役立てようと努めております。そのために必要な研修の内容は、おのずから明らかであり、各プロバイダーによってそれぞれ工夫がなされ、実施されています。そして、質の高い研修が全国に広く提供される状況が保たれていれば、研修や認定の方法や条件等については、足並みを揃えることを特に急ぐ必要はないと考え、まだ試行錯誤の状態です。

研修・認定の方策や取り決めなどというものは、時代に即応してその都度正しい判断をすべきものであり、随時変化してもよいと考えます。むしろ上記理念を達成するためには、表面的には方策を変えなければならないこともあると考えています。

「君子豹変す」は俗に好ましくない意味に使われがちですが「君子ががその過ちを改めると鮮やかに面目を一新する（広辞苑）」というのが原義です。また、佐々木 閑氏（花園大学教授）は、「改正手段なき律の不幸」と題して、僧侶が「律」を絶対視して「永久不滅の真理だ」などと考えていると、時代の変化に対応できなくなることを例にとり、規則は守らなければならないが、一方で、規則自体を時代に合わせて変更することも必要である、と述べておられます（2008.7.24 朝日新聞夕刊）。

われわれは今後も、薬剤師の生涯研修について、目標を見誤ることなく、固定観念にとらわれず、現状を固執せず、随時方策を変えて最善に近づく努力を続けたいと考えております。

（2008.8.25）